様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２９ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１２９３３

研究課題名（和文）和刻本漢籍のパースペクティブ

研究課題名（英文）A New Perspective on Japanese Reprinted Chinese Classics

研究代表者
東野　陸（李増先）（TONO, RIKU (LI ZENGXIAN)）

立命館大学・衣笠総合研究機構・プロジェクト研究員

研究者番号：９０７５５４９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はケンブリッジ大学図書館ロックハート旧蔵書の和刻本漢籍の由来を明らかにする。成果の概要は次に述べる通りである。
2020年度、研究対象の一部は佐賀藩須古鍋島家に由来することを判明できた。2021年度、自筆目録のデータ化と筆者が作成したデジタルアーカイブの関連付けを行った。2022年度、新たに人工知能による手書き文字認識を試みたか、技術自体は実用的でないため使用を断念、手作業に転換し、データ化を進めた。2023年度、コロナ禍で停滞していたフィールドワークを実施、書簡等を精査した結果、コレクションの成立は自らの蒐集活動と共に、当時贈答品として和刻本が使われていた事を判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
和刻本の研究は目録学や書誌学に基づく研究がほとんどだ。また、それを対象としたデジタルアーカイブは更に限られる。一方、本研究対象はかつて日本国内で大量生産・消費され、幕末・明治の開国に合わせ、輸出され当時の入植者等によって蒐集され、諸外国に持ち帰った。その所有者が没後に蔵書が売却・寄贈されたりすることによって、現在欧州諸国のアジア研究関係の蔵書が形成された。しかし、本研究が問題視する「和刻本」というジャンルの書物が国外でどのように評価された研究は見られない。言わば、本研究はその流通を通して評価し、和刻本のピアレビューを明らかにすることが目的、その視座の独創性は意義として見出されよう。

研究成果の概要（英文）：This study aims to elucidate how the Japanese Reprinted Chinese classics from the Lockhart Collection at Cambridge University Library.
The summary of the results can be found as follows: In 2020, a considerable portion of the books were originated from the Sugo-Nabeshima of the Saga Clan. In 2021, the transcription of Lockhart's handwritten catalogs was carried out, along with linking them to the digital archive created by the author. In 2022, attempts were made to adopt AI for handwritten recognition, but due to the impracticality of the technology, it was abandoned in favor of manual methods. Fieldwork, which had been stalled due to the COVID-19 pandemic, was conducted in 2023. Through careful examination of correspondences and other documents left by Lockhart, evealed that the formation of the collection involved the Lockhart acquisition efforts, and also Japanese Japanese Reprinted Chinese Classics were used as gifts at the time.

研究分野：和漢比較文化論

キーワード：和刻本漢籍　東アジア　漢字文化圏　ケンブリッジ大学図書館　在外日本古典籍　ロックハート　デジタルアーカイブ　漢籍の享受

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究の開始当初の背景として筆者のそれまでの経験に影響される部分が大きく、後期課程在学中の 2012 年度に立命館大学のインターナショナル・トレーニング・プログラム（「文化遺産と芸術作品を災害から防御するための若手研究者国際育成プログラム」）に応募・採択されたことである。日本の文化遺産が幕末・明治期に海外へ大量流出したことは、様々なメディア上では知られたことである。しかし、それを実感できたのは当該プログラムに採択され、大英博物館に行く機会を得られたときである。

2012 年 9 月～11 月の間にロンドン大学アジアアフリカ研究スクール（SOAS）が受入機関となり、大英博物館の協力を得て、文献の悉皆調査を実施した。同館所蔵の膨大な量の日本絵画・書籍に嘆賞する傍らに、海外研究機関のコレクションのほとんどは個人の旧蔵に由来することを知った。

その翌年、筆者の学会参加および研究調査のために、ケンブリッジ大学図書館に訪れた際、本研究の調査対象であるロックハートコレクションの存在を知ることができた。同館の古典籍のほとんどが個人の旧蔵書に由来し、漢籍の場合はトーマス・ウェード卿（Sir Thomas Wade, 1818-1895）、グスタフ・ハロン（Gustav Haloun, 1898-1951）の旧蔵書をはじめ、和書の場合はウィリアム・アストン（William Aston, 1841-1911）、アーネスト・サトウ（Ernest Satow, 1843-1929）の旧蔵書が多くを占めている。日本でよく知られる人物も含まれており、いずれも動乱期の東アジア（中国・日本）に滞在した学者・外交官達が自ら蒐集した書物である。

しかし、これらのコレクションと異色な経歴を持つものがあり、それが本研究対象のロックハートコレクションである。ジェームズ・スチュワード＝ロックハート卿（Sir James Haldane Stewart Lockhart, 1858-1937, 以下ロックハート）はスコットランド出身のイギリス外交官であった。1880 年～1921 年の約 40 年の間に、中国に滞在し、香港と威海衛の管理を任されていた人物である。1898 年までは香港の登録総監（Registrar-General）等の職を歴任し、翌年から 1921 年の退職まではイギリスが新たに中国から租借した山東省威海衛の総督（Civil Commissioner）として職務を全うした。イギリスに帰国後もロンドン大学東洋研究学院（現 SOAS）の理事や王立アジア協会（Royal Asiantic Society）の事務総長等を勤め、中国関係の論文や著書を多数発表した(1)。

既刊の『ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録』にはロックハートコレクションについての言及があり、本研究対象のことを「1937 年にケンブリッジ大学図書館に買収された」、「その中身のほとんどが和刻本漢籍である」としている(2)。しかし、筆者の過年度の研究によって、同目録に本研究対象についての記述は誤りであることが判明した。本研究対象は、実に 1937 年と 1948 年の二度にわたり、ケンブリッジ大学図書館によって買収されたことが明らかとなった。更に同目録に「ロックハート旧蔵」と明記されているものは、確かにそのほとんどが和刻本漢籍であるものの、1937 年ではなく、すべては 1948 年に購入したものである。その成果を研究発表・論文の形での報告に加え、ケンブリッジ大学図書館の公式サイトのケンブリッジデジタルライブラリー（Cambridge Digital Library、 以下 CUDL）でも報告した。

しかし、先述のようにロックハートは生涯の半分を中国で過ごし、その旧蔵書に宋・元の古版本ならともかく、相当量の和刻本漢籍が含まれていることが注目に値すると考えた。つまり、本研究が研究対象としたのは中国で蒐集された和刻本漢籍である（右図）。

周知のように、「漢籍」とは一般的に漢字で書かれた書物のことだが、いわゆる「漢字文化圏」であった中国・日本・朝鮮・ベトナムでもその需要があった。一方、日本で流通していた漢籍の中には宋・元の古版本をそのまま使用したケースもあれば、多くの場合はそれらを複製・覆刻したものである。このように、日本で出版された漢籍のことを和刻本漢籍と呼ぶ。勿論、日本で使用されることが前提とされており、漢文に訓点・注釈等が附されることが多いのは言うまでもない。

ロックハートコレクション成立の概要や彼の没後の旧蔵書の行方、また、ケンブリッジ大学図書館が購入した彼の旧蔵書のデジタルアーカイブは、過年度までの研究で達成した（若手研究 B：17K13399）。しかしながら、その旧蔵書の全貌や和刻本漢籍の由来、当時の東アジアに和刻本漢籍の流通実態についての詳細は未だ明らかになっていない部分もある。言わば、日本以外における和刻本漢籍の学術的価値についての評価はまだ疑問として残る。そのなかで筆者はこれまでの研究を基盤とし、本研究で問題視する先述の課題を明らかにしたいと考えた。

⑴ Shiona Airlie, *Thistle and Bamboo: the Life Time of Sir James Stewart Lockhart*, Oxford University Press, 1989
⑵ ピーター・コーニツキー　林望共編　『ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録』　ケンブリッジ大学出版会　1991 年

２．研究の目的

現在日本国内外における和刻本漢籍の研究はあるものの、いずれも書誌学や漢籍受容等といった従来の分野にとらわれたものである。本研究の疑問に答えを示すような先行研究は申請者過年度の研究のほかに類を見ない。

従来の日本では和刻本漢籍についての研究は主として漢籍の覆刻を中心に出版目録の作成など書誌学的な研究が進められてきた。また、中国においてはどのような和刻本漢籍が日本から流入したかや、目録学に基づく悉皆調査の研究が主流である。そして、イギリスでは和刻本漢籍の文化的側面の意義解明が中心であり、本研究が目的とした海外における和刻本漢籍の流通実態および学術的価値の解明についての研究は皆無に等しい。言い換えれば、本研究のような視座を持つ先例がまだ見られない。

さらに、本研究は日本文学・中国文学・イギリスの東洋研究の幾つもの分野を横断する新たな試みであり、その独自性がある。本研究の遂行にあたり、日本語・中国語・英語の 3 つの語圏にわたる一次資料を使用し、ウェブ技術を用いて研究成果を 3 つの言語で公表する予定で、そこに従来の研究と異なる創造性も認められる。それらは今後クロスランゲージリサーチの参考資料や参照事例としての価値も見出されよう。

そして、本研究が完成したあかつきにそれぞれの学界で発表することによって、3 つの語圏の研究活動の活発・連携も見込めるところにも意義がある。

３．研究の方法

研究目的に照らし、本研究開始時の研究期間を 3 年間としたうえで、以下の 4 点を中心に研究を進めた。

① ロックハート旧蔵書自筆目録のデータベース化とその公開準備
② 書簡など周辺資料の調査
③ CUDL 公開アーカイブのメタデータの充実
④ ロックハート旧蔵書自筆目録データベースと CUDL 公開アーカイブの関連付け

イギリスの National Library of Scotland（以下 NLS）には Lockhart Papers と受託された一群の資料があり、それらはロックハート生前の書簡や未出版の手稿などが含まれた資料群である。申請者はすでに過年度中にその中からロックハート自筆の旧蔵書目録を発見し、複製を入手した。研究計画一年目はその目録のデータベース化に着手し、書簡などの資料から蔵書成立までの経緯を探る。加えて、申請者が過年度までに作成した 400 点を超す CUDL で公開中のデジタルアーカイブのメタデータの充実を実施する予定である。

そして、二年目は旧蔵書目録の公開準備を進め、ロックハート旧蔵書自筆目録の所有者であるスコットランドのジョージワットソン学院（George Watson's College）と協議し、公開の諸事項を決定する。さらに、昨年度から進めてきた CUDL で公開中のデジタルアーカイブのメタデータの充実を実施する。

それから、最終年度にはロックハート旧蔵書自筆目録データベースの公開を目標とし、CUDL で公開されたデジタルアーカイブのメタデータの充実を継続する。

しかしながら、2019 年末に新型コロナウイルス感染症が世界的に流行し、世界中に渡航禁止措置が取られ、筆者も当初の研究計画の変更を余儀なくされた。それに、基金の使用期間が 1 年間の延長が認められ、それを踏まえて本研究期間中得られた成果は年度ごとに次項で詳述する。

４．研究成果

本研究課題の主な研究成果は年度ごとに下記にまとめる。

2020 年度、2019 年度末から海外への渡航制限が世界中で厳しく敷かれていた。それに、長期化すると予想し、フィールドワークなどを除き、人的移動を要しない研究を繰り上げて実施した。特に自筆目録のデータ化および筆者がそれまでに入手していた書簡などの資料の複製を用い、判明したロックハート旧蔵書の由来およびコレクションとしての特徴の分析に着手した。その結果として、以下の事実が判明した。

まず、研究対象の一部は蔵書印等を手掛かりに、旧佐賀藩須古鍋島家に由来することが明らかになった。明治期の廃藩置県のため、藩校の旧蔵書が流出したことに起因するであろうが、詳しい流出経路の特定まではできなかった。

次に、研究対象に勧善書の存在を多く確認できた。勧善書とは明末から清にかけ、中国大陸で流行した儒・道・仏の三教の思想を習合した民間信仰、善行を勧める類いの書物である。ロックハートは当時流行したほとんどの善書を蒐集したことが明らかになった。

そして、朝鮮漢籍の存在も確認できた。和刻本漢籍のように、朝鮮半島でもかつて多くの漢籍が出版されていた。その享受は朝鮮半島内のみならず、日本・中国でも需要があったことは以前から知られているが、本研究対象はその具体例としてケーススタディーに値することも言える。

2021 年度、渡航制限は前年度に引き続き、フィールドワーク等の実施は依然厳しい状態であ

る。そのため、自筆目録のデータ化に引き続き、新たな試みとしてAIによる手書き文字認識の技術（Handwritten Text Recognition、HTR）を取り入れ、自筆目録のデータ化を試みた。しかし、複数のツールやプログラムを使用してみたところ、理想的な実験結果が得られなかった。特にレイアウトの判別が非常に難しく、出力された結果は利用できる状態のデータではなかった。そのため、該当年度は手作業へと変更し、研究計画を進捗した。

2022年度、海外への渡航制限が続く中、研究計画全体の遅れが生じており、当年度はAIによる手書き文字認識を再度挑戦した。昨年度とは異なるツールを利用し、レイアウト等はあらかじめ筆者によって決めておき、それから、プログラムによる文字認識を試みた。しかし、筆跡を確認すると目録は複数の人物の手によって作られたため。さらに、アルファベット・漢字にくわえ、時にラテン語も入り交じる。昨年度の実験結果よりは幾分良くなったが、依然データが利用できる状態ではない。特に、異なる筆跡の場合はプログラムがほとんど解読できず、該当技術は現段階において本研究への応用が困難だと判断し、再び手作業によるデータ化に切り替え、研究計画を進めた。

2023 年度、昨年度に引き続き自筆目録のデータ化を進捗しつつ、年度内で完了できなかったものの、そのほとんどの解読は完了したため、完成次第に資料所有者のGeorge Watson Collegeと交渉し、データベースとしての公開準備を進める。

そして、今年度はコロナ禍で停滞していた海外フィールドワークを実施し、大英図書館・ケンブリッジ大学図書館・スコットランド国立図書館に散在する関連資料を精査し、コレクション成立時の時代背景および原蔵者の人物像をより立体的に捉えることができた。コレクションの成立はロックハートの精力的な蒐集と共に、和刻本は頻繁に贈答品として使われていたことを明らかにした。

最後に、過年度までに作成したデジタルアーカイブは数年遅れてCUDLに追加公開され、現在CUDLでは480タイトルのコンテンツを一般公開されている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 RIKU TONO	４．巻 Vol 4
２．論文標題 The Distribution of Wakokubon Outside Japan: Through the Book Collection of Sir James Stewart Lockhart	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Asia-Japan Research Academic Bulletin	６．最初と最後の頁 pp.1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34389/asiajapanbulletin.4.0_31	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 東野　陸
２．発表標題 東アジアにおける漢籍需要の多様性
３．学会等名 第83回国際ＡＲＣセミナー
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

１．著者名 中西　健治、ほか３２人	４．発行年 2024年
２．出版社 武蔵野書院	５．総ページ数 596
３．書名 日本古典文学の言葉と思想	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Cambridge Digital Library Japanese Works https://cudl.lib.cam.ac.uk/collections/japanese/ ケンブリッジ大学図書館蔵古典籍閲覧システム https://www.dh-jac.net/db1/books/search_cambridge.php

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関